

種別概念の独自性と異質な概念の排斥

横路 佳幸 Yoshiyuki Yokoro
慶應義塾大学

本発表の目的は、構成主義に対して提起されてきた存在論上の諸問題の一つである「恣意性問題」に対して、新たな解決策を与えるための見取り図を描くことである。

構成主義 (constitutionalism) とは次の主張を行う立場を指す。すなわち、異なる種別概念 (sortal concept) に属する個体は、空間的に一致し物質的諸部分を共有するとしても、同一性関係ではなく構成関係に立つ。たとえば、銅の塊に属するランプルが彫像に属するランプルと特定の同時空領域に位置し特定の物質的諸部分をすべて共有するとしても、それらの間には非同一性の代わりに構成関係が成立する。構成関係はこのとき、同一性 (identity) と独立性 (separateness) のいわば中間に位置する (厳密順序であるような) 関係である。つまり、ランプルとゴリアテは一方で、種別概念 (あるいは様相的性質や歴史的性質) を異なくするゆえに同一ではありえず、二つの異なる個体である。他方でそれらは、空間的に一致し物質的諸部分を共有する点、そして一方が他方から「構成」されている点において、まったく別個で独立の存在者というわけでもない。こうしたありふれた「一致ケース」に対して構成主義者が説明してきたのは、「空間的に一致する二つの異なる個体が存在する」という事態がそれほど突飛でも反直観的でもないということである。近年では、銅の塊と彫像の一致ケースに関する議論のほかにも、身体や脳、動物に還元されない人の存在論 (personal ontology) に関する議論や、いわゆる古典メレオロジーに対抗する新たな潮流としての質料形相論 (hylomorphism) に関する議論の高まりもあり、構成主義は新たな展開と応用可能性を見せている。

しかし、それと並行して、構成主義が抱える問題もこれまで (少なくない現代形而上学者によって) 数多く提起されてきた。その中で私が本発表で注目するのは、「恣意性問題 (arbitrariness problem)」である。恣意性問題とは、次のステップから成る。第一に、奇妙で異質な概念 F^* (e.g. outcar, klable, snowdiscall) を想定する。 F^* は、我々になじみ深い種別概念 F (e.g. 猫や山、彫像) とはまったく異なる同一性規準を与えるとする。第二に、奇妙で異質な概念 F^* に属する個体と種別概念 F に属する個体には、存在論上重要な違いはないと考えられる。 F は我々人間の偶然的な (生物・社会・文化上の) 諸要因によって生み出された産物にすぎず、 F^* に属する奇妙で異質な個体が存在しないとす根拠はないからである。第三に、以上により、 F に属する個体に加えて、 F^* に属する個体も存在することになるゆえ、個体の数が爆発的に増加してしまう。一致ケースで言えば、先のランプルとゴリアテと同時空領域には、何らかの奇妙で異質な概念 F^* に属する個体がおびただしい数で存在しているとしてもおかしくないことが導かれる。よって、二つの個体のみを (我々に馴染み深い種別概念である銅の塊と彫像を根拠に) 認める構成主義の主張には、大きな疑念が呈されるということになる。簡略化すると、恣意性問題は次の単純な論証から成る。

- (i) 我々に馴染み深い種別概念 F と、奇妙で異質な概念 F^* の間に存在論上重要で決定的な違いはなく、また F に属する個体と F^* に属する個体の間にも存在論上重要な違いはない。
- (ii) (i) より、 F に属する個体だけ、同一性や存在を認めるのは恣意的である。
- (iii) ゆえに、 F と同様に F^* も種別概念であるとみなし、 F^* に属する個体にも同一性や存在を認めるべきである（または逆に、 F と F^* がともに種別概念ではない（さらに言えば種別概念など初めから存在しない）とみなし、 F^* はもちろん F に属する個体の同一性や存在を実質的な意味では認めないでおくか、あるいは F と F^* が異なる概念枠に属する相対的な概念だとみなし、 F や F^* に属する個体の同一性や存在も概念枠に相対的なものだとみなすべきである）。

恣意性問題は、構成主義独自のアイディアである「構成関係」そのものを直接に論駁するものではないにせよ、構成主義の屋台骨の役割を果たす「種別概念」のあり方を揺るがす根本的な困難である。だが、そうした重大さにもかかわらず、構成主義者が恣意性問題に対し有効な解決策を提示してきたとは言いがたい。

そこで、本発表で私は、構成主義者が恣意性問題を適切に解決するためには、種別概念とはそもそもどのようなものかを抜本的に見直す必要があると論じる。その際キーワードとなるのは、種別概念の「実在性」と「人間中心性」である。種別概念が、我々人間の偶然的な関心や観点に依存する一方で、いわば「実在を切り分け分節化する力」を持つことは可能だろうか。もしこれが可能であるならば、上記の論証内の(i)における「我々に馴染み深い種別概念」は、「奇妙で異質な概念」から明確に区別され、ある意味で「特権視」してよいことになる。私が構成主義者として本発表で素描するのは、種別概念が独自の (*sui generis*) であること、そして奇妙で異質な概念がそこから排斥されることを示すための見取り図である。